

野鳥たより

—北海道—

第 9 号

編集者 北海道野鳥愛護会
発行者 北海道国土緑化推進委員会
発行日 昭和47年2月
5月・8月・11月・2月 年4回発行

シマフクロウ

シマフクロウ——この巨大なミミズクをアイヌはコタンクルカムイと呼び、神々の中で最高の地位を与えた。

彼は夜の森の支配者であった。二メートル近い彼の翼が音もなく樹間に羽ばたくとき、闇はますます暗さを増した。彼の咆哮が森の奥に響くとき、静寂はいっそう不気味さを増した。

とおい昔、人が自然に従い、自然の中に神を見ていた時代には、彼は北海道の森に王者として君臨していた。

だが、北海道の自然は、彼が生きてゆくにはあまりに小さくなりすぎてしまった。原生林の伐採がすすむとともに、彼が巣をつくれるほどの巨木はなくなっていた。夜毎、彼が漁に出ていた川は汚れ、サケはのぼらなくなった。

そうして、彼の勢力は衰えていった。いま、彼は知床や大雪山麓などにわずかに残る森に、細々と生きているだけだ。道東地方では、ときおり、養魚場に魚をとりに来るものや、市街地近くにさまよい出たものが人手にかかることがあるという。

シマフクロウの容貌は、他のフクロウに比較すると際立ってきびしい。その眼に激しい怒りと諦めをのぞかせながら、彼は人間の自然に対する所業のゆくえをじっと見すえているかのようにある。



写真は47年1月、根室標津で 撮影 野村梧郎



自然保護への 輪を広めよう

ウトナイ湖の自然を守れ

野鳥愛護会では、恒例により4月初にウトナイ湖畔の探鳥会を計画している。

昨年冬の探鳥会では、破壊が進んでいるとはいえないが、白銀におおわれた水上に、雄壮なオジロワシの姿が2羽も望見できたし、ミサゴ、アオサギ、それに数百羽を越えるハクチョウ、ガンなど、人々の目を楽しませてくれた。またウトナイ湖周辺の湿原は、野鳥の宝庫でもあり、いつも自然の息吹きにあふれている。

百万都市札幌から約1時間、道央の工業地帯と化しながらも、なおこうした原始性が保たれ、自然が生きていることに科学する目を注ぐ必要がある。

鳥は空だけがあれば飛べるものではない。すべての生物と同じように、安息、休養、繁殖、えさ場等、こうした自然条件が必要である。とくに渡り鳥には、繁殖の場所のほか、渡りの中継基地を必要とする。

ウトナイ湖畔は、数千年を経て形成された自然の文化財である。そこに多くの自然生態系の神秘的なカギがある。数千万年の大古から、本道を経由する渡り鳥の大群にとって、幾つかのステーションがあったことは想像に難くない。地形から見て、ウトナイ湿原は、その重要な拠点となっていたものであろう。

最近、苫小牧港の拡張にともなって、宅地造成の波はこの湖畔の湿原をどんどん埋め立てている。そして、この湖水を囲んで堰堤を築く計画があるという。ウトナイ湖の保全のためとはいうが、それは単なる水ガメを造ることである。こうした破壊の影響から、今年はオオハクチョウの数も少ないことが指摘され、地元の自然保護団体が、破壊防止のために立ち上がる動きを見せている。

今からでも遅くはない、破壊のすべてを中止して湖畔一帯の学術、科学的な調査により、最大限の保全をはかるべきである。原始性に富んだ湖沼、湿原は、失われては再びよみがえることのないこの地球上の唯一の文化財である。

自然保護への価値観を変えよ

大石長官の発言から、公害対策、自然保護への論議がにわかに高まっているが、長官の発言は多くの自然保護論者を勇気づけ、自然保護への価値観を高めたことに賞

賛を与えたい。

人間も自然物の一つとして、自然生態系の中に存在する生物なのである。したがって、この自然生態系を破壊することは、やがて人間の生存にも大きな危機をもたらすことは必定である。

本道でも大雪山縦貫道路の計画とか、サロベツ原野の酪農計画が話題となり、開発か、自然保護かで論議が発展している。開発か、自然保護かという論議を、同一の軌道に置いて論ずることは危険である。開発は当面する経済論議であり、いつでも手直しができるものである。しかし自然保護は、人類全体の生存の問題として、将来にわたって検討が必要で、その価値は比較にならないほど重いのである。

オリンピックの恵庭岳コースの復元について、せっかく10億円もかけたのだから惜しいと、存続を望む声も強いが、自然保護の価値は、金銭や経済効果と同一視すべきものでないことを明らかにするためにも、この復元の措置は、時宜を得たものといえよう。

保護論争へのキャンペーンを

道野鳥愛護会も、結成以来2周年を迎えようとしている。この間、多くの会員の加入があり、探鳥会や、懇談会等の行事に参加する会員の数もどんどん増加している。

愛護会の結成された目的は、単に鳥を見て楽しむという性格ではなくて、むしろ、積極的に野鳥保護への輪を広げることにある。野鳥愛護会の運動に参加することによって、自然のすぐれた論理を悟るべきである。

大アフリカの草原を移動するカモシカの群れを囲んでライオンや各種の食肉動物も移動する。それは一見自然の残酷さのようでありながら、カモシカの異常な繁殖によって草原の荒廃を防ぎ、自然界は絶妙な平衡を保っている。人間は一方的な破壊に終始しているが、それがどんなに危険なものであるか、最近の公害のすべてが証明している。愛護会の人々によって、声を大きくして叫ぼう。「自然はすべての生物のものであり、人間の生命の源である」と。

ナイチンゲールを聞く

土 屋 文 男

プラハを飛び立ったチェコスロバキア航空機は東独、次いでバルト海の上を飛行し、デンマークの首都コペンハーゲン上空に達していた。羽田のように海にせり出したカストラップ空港。海の色が特殊で、エメラルド色の絨毯をしたようである。その海に吸い込まれるように機首をさげて着陸した。少々薄気味の悪い空港だと思ったが、わたしが帰国直後、ハンガリー航空が着地に失敗し、多数の遭難者を出したとのことであった。

白いカモメが飛ぶ。よく見ると、数の多いのはユリカモメで、ヨーロッパでは最近、このカモメが急に増えたという。しかも、カモメ類が海だけの鳥でなく、内陸部にも棲息して、原野を耕すトラクターのあとを追いかけて、土中の虫などを食べる光景も見た。

空港のフィンガーはパリに次いで長く、北歐らしくスッキリしている。看板はデンマーク語。英語のCOPENHAGENがCØBENHAVNである。入国審査は数秒間で、拍子ぬけがした。前泊地のプラハは入国は簡単であったが、出国のときはジロジロと三回、中二回は警官によってチェックされたので、少々緊張していたからである。

その日はお定まりの観光。夕刻、ホテルに入る。同行の人たちは皆有名なプレイ・ガーデン「チボリ遊園地」に行くというが、この夜は一人で行動することにした。ナイチンゲールの生の声を聞くためである。

わたしたちが中学生時代に使った英語のリーダーに、一番よく登場した鳥はロビンとナイチンゲールである。あるとき、ナイチンゲールの鳴き声と分類を質ねたところ、東大出の先生に余計な質問をするなど言われたことがあった。今でも記憶しているが、日支事変の起きた直前のこと。

ロビンは駒鳥、ナイチンゲールは夜鳴鶯と文学書にも英語の虎の巻にも書かれていた。しかし、ロビンはわが国の駒鳥ではなく、ナイチンゲール、もちろんウグイスの仲間ではない。

プラハでもスイスのジュネーブでもナイチンゲールらしい鳴き声は聞いたが、他の鳥も一しよに鳴いていたし少々距離があったので、満足するまで聞けなかった。とにかく、中学生のときの夢をはたそうというのであるから、期待に胸をふくらませてホテルから早々に出ようとした。後から誰か呼ぶ声がするので振向くと、ロビーの民芸品売場の長身の娘が立っていて、最近物騒なので

貴重品などホテルに預けていった方がよいと言う。さつきガイドが、刑務所はガラガラだと言ったのではないかと反論したかったが、語彙(い)が足りなくてコトバにならない。この国では小学校からドイツ語も教えているせいか、ドイツ語の通用するのありがたいかつた。そして、あのベチニヤとペゴニヤの植っている近くの木の下で聞きなさいと言う。くれぐれもホテルから遠く離れないようにと念をおして帰っていった。

五分もたたぬ中に鳥が鳴き出した。想像していたよりずっと大声で、少々耳ざわりでないこともない。

「チリリ、チリリ、キョキョ、キョーン、キョーン、ツイーン……」と鳴いてから「チ、チーッ、キョーン、キョーンキョーン」と鳴く。出発前に「ヨーロッパの鳥」というLPレコードで少々聞いておいたのだが、どうも本物はもっと激しく鳴いた。

「キョーン、キョーン、ツイーン」と力強く鳴くものもあつた。

やはり夜鳴鶯といったイメージでなく、現在の和名の「サヨナキドリ」にふさわしい。ちなみにデンマークで聞いたものは「キタサヨナキドリ」である。西洋人にとっては、やはりロマンチックな鳥で、ロミオとジュリエットの第五場、ジュリエットの寝室での二人のやりとりは有名。

<ジュリエット>もういらっしやるの。夜明けにはまだ間がありますワ。びくびくしていらっしやるあなたの耳に今、聞えるのは、「ヒバリ」ではなくて「ナイチンゲール」

<ロミオ>いいや、ナイチンゲールではない。朝の先触れのヒバリだ。……

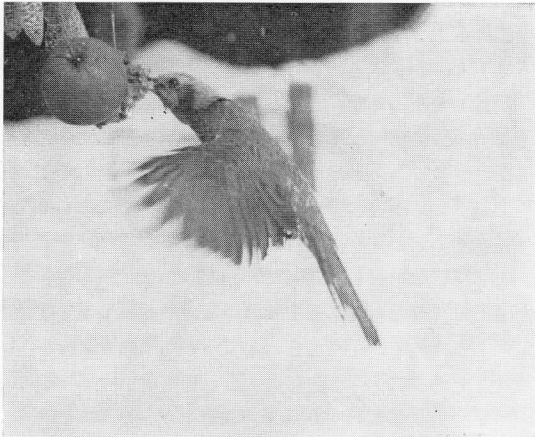
かつてシエークスピアは夜をナイチンゲールで、早朝をヒバリでと、巧妙な手法で表現したのであると、教えて下さったのは内田清之助博士であつた。

翌朝、食堂の前で昨夜の娘さんに会う。ナイチンゲールがよく聞えましたかと言うので、十分堪能したと答えると、何度もよかったですねと言った。朝食のとき、窓の外に目をやると雌雄のスズメが仲よくパンくずを食べていた。ヨーロッパのスズメは雌雄、羽彩が違うので見分けられるのである。頭の上部はグレーであるが、何れの図鑑の色彩より、少々淡色であるような気がした。

(本会副会長、昨年6～7月ヨーロッパ旅行)

ヒヨドリの曲芸

小堀 煌 治



夏の間、森の奥深く身をかくし、なかなか姿を見せないヒヨドリだが、雪の訪れとともに〈ピーヨ・ピーヨ〉と人里にあらわれる。おせじにも美しいとはいいがたいが、地味な色調はいかにも日本的である。

先日、さいわいにも間近に観察する機会にめぐまれ、

その芸達者ぶりに感心した。木にぶらさげたりリンゴをつつきながら、ピタリと停止飛行を決めるのである。体操でいえば、まさにウルトラCクラスである。身近でこれほどの技術を持ち合わせた鳥に出会ったことはない。以前記録映画でハチドリ生態を見たことがあるが、花のミツを吸うとき、これとまったく同じ飛びかたをしていた。この飛びかたを専門家は停止飛行と呼んでいる。ハチドリ翼の構造は特殊なもので、推進力は持たず、揚力だけを得るような飛びかたができるらしい。熱帯地方に住むハチドリと北海道のヒヨドリが同じ能力を持っているのは不思議な話である。

だが、思い当たることもある。ヒヨドリはもともと南国生れで、ツバキのミツが大好物、本州ではくちばしを花粉で真黄色にしながら吸いついているそう。それがいつの間にか北は樺太まで生活圏を拡げ、先祖が身につけた芸を北国のリンゴをつつきながら立派に生かしているのである。

野鳥の日記

さとう 実

'71. 9. 23 晴 12:05キツツキのドラミングをきいたような気がした。が、家の横の水道局の資材置場でいま大工仕事をしているので、何かそこからの音だろうと思っていた。と、家内が、おとうさん、おとうさん、とせきこんで呼ぶ。瞬間、やっぱりキツツキだな、と思っただけで台所へ飛んでいった。なんて美しい鳥だろう。はじめてみるこの鳥の美しさに一種の感動を覚えた。巣箱にとまってその入口の円の周囲を盛んに突いている。後頭部の赤、翼の白黒の緋などまことに美しい。しばらくしてそのそばの木に飛び移り、それから飛んでいった。

図鑑をみる。「原色野外鳥類図鑑」下村兼史著・三省堂1945年3版。エゾアカゲラのオスのようだ。

9・24 晴 9:08エゾアカゲラまた来て、15分間巣箱のふちを拡げるようにつついてはときどき中に入り中からもつつく。住んでくれればいいが。

9・27 雨・寒い 15:04ピピピ…ヒヨドリか、声

が速い。間もなくギギギ…ムクドリか。

10・7 曇 15:37ギヤギヤアカケスが裏の雑木林で。

10・23 曇・時雨パラパラ 9:37エゾアカゲラしばらくぶりて来た。例の巣箱の入口の周囲をつついては中へ一、二度出入しただけで行ってしまった。

ひる頃、大根を引きながらきいたこえ。トビ、ヒヨドリ、ムクドリ。

10・24 手稲山に初雪、里は雨が降ったりやんだり 15:50ピピピ…ヒヨドリの声。

10・25 今日降ったりやんだり。 14:30カケス裏の林にくる。カケスは子供の頃から知っている。が、図鑑をみる。頭が白く、黒い点々がついている。さて、いまみた頭はどうだったろう。こんど注意しよう。

ヒヨドリ裏の林から3・4羽飛んで行った。はじめ皆カケスかと思ったが、飛びながらピピとないたのでヒヨ

とわかった。

10. 30 晴 朝、カケスの飛ぶところをみた。

16:11 ヒヨドリと似たなき声だが少し違う。何鳥だろうか。

11. 8 曇・初雪 9:00裏の林に前後してカケスとヒヨドリが数羽ずつ来て、しばらくツルウメモドキのからんだ木に来て、その実をつついていた。カケスがヒヨドリを追うようだ。カケスの頭をみた。図鑑のところが。また図鑑をみる。ミヤマカケスだ。本州のとは亜種を異にする、となっている。

11. 10 うす曇・午後曇る 朝、裏の林の上をわりに長い翼の鳥が1羽、ちよつと変った声で一、二度鳴きながら南から北へ飛んだ。なにか水鳥ではないかと思つた。11:55モズの声、すぐあと軽い地震。

11. 19 曇、少し陽が射す 2時ごろ裏で仕事をしていたら、すぐ近くの枝に3羽の小柄の小鳥が来て、鳴きながら枝移りしている。図鑑をみたらシジュウカラのようだ。

11. 30 10:15裏の林の雪のかかった背の高い木のてっぺんに小鳥2羽来た。双眼鏡をとりにいっているうちにいなくなった。ヒヨドリらしいと思つたが、少し尾が長かったような気がする。

12. 13 20センチほどの雪で、まだ降っている。

11:20窓から150メートルくらい先の、背の高い一本樹に鈴のように小鳥がとまっている。双眼鏡でみるとムクドリで16羽。その木のそばの道路をトラックが走ってきたら、飛立って裏の林に移つた。

12. 17 曇 13:55家内が呼ぶので台所へ行く(この観察記はほとんど台所の窓からである)。例のツルウメモドキの木にキツツキが来てさかんに突いているが、前のエゾアカゲラと違う。頭に赤がない。二、三度枝移りしたが、一番低いときは地上1mくらいの枝まで移つた。突きながら上ると下るが、どちらが多いか。どうやら上るのが多いようだ。ツルウメモドキの実を食べない。居なくなるまで見ていようと思つて双眼鏡をかまえていたが、そのうち隣の屋根の方(北東)へ飛んで行つた。20分ほどいた。エゾアカゲラのみだ。14:45ムクドリがツルウメモドキの木とちよつと離れてこれよりもずっと背の高い木のてっぺんと2群に分れて各7、8羽ずつ。

12. 21 晴 8:40台所の真ん前の例の木の枝にヒヨドリ1羽だけいて、大分前からなのか、足を折りたたんで腹を枝につけ、落着いた恰好。家内が窓を開けたらピピと鳴いていたと。昨日、家内が物置のうしろ(4メートルほど)にエサ台(高さ2メートルたらず)を作って、パンなどを置いたが、スズメが近くまで来てもエサ台につかない。11:15エサ台にヒヨドリ1羽来て家内大喜び。11:45ミヤマカケス3羽、エサ台の近くの枝にと

まっている。家内は大騒ぎ。そのうち1羽は近くの畠の雪の上に捨てた台所のゴミへ移り、残つた1羽はエサ台の近くに隣との境に置いた木材の上においたパンをくわえて飛んで行き、また来てそうした。スズメも10羽以上いて、エサ台の下にこぼれたのをひろっている。

12. 22 晴・強い風 13:15ツルウメモドキの木にムクドリ2羽。1羽はツルウメモドキの実をつついてくる。この木にスズメも7、8羽。そのうちの3羽エサ台に来る。スズメたちは枝からエサ台に直線に来ず、近くの枝に2、3度とまってから来る。どれも皆同じ。用心深い習性のようだ。

12. 23 晴 きのうエサを補給してから、スズメも寄りつかなくなつたと家内がいう。これからは、補給は夕方か夜、小鳥たちのいない間にしようと思つた。

12. 25 曇、わりに暖か 11:25エサ台にミヤマカケス1羽来た。来ると前にいたスズメたちは飛び去る。カケスはスズメがエサ台に来るときのように、なんべん



も枝移りせずに、遠くからパッと直線に来る。

12. 27 うす曇 10:43エサ台にスズメいたらヒヨドリが1羽来て、スズメは飛んだ。そこにミヤマカケスが来て、ヒヨドリがさけた。近くのスズメたちもパッと飛立つた。

12. 28 晴、風あり 16:00エゾアカゲラのみ、ツルウメモドキの木の枝をつついてすぐ飛んでいった。

12. 29 晴 15:45エゾアカゲラのみ、例の木に来て、半ばあたりからテッペン(枯枝)まで、たたき、たたきのほり、南の方へと飛んでいった。この間8分。

12. 30 曇 8:43エサ台にスズメやつと1羽だけいくらかも食べずにすぐ飛んでいった。お正月のアンコくつ小豆のカスを置きにいてみたら、きのうの朝おいてきた麦はまだ残っており、リンゴは二、三度つuitたあとだけだつた。10:08畠に捨てた台所のゴミにカラス11羽きている。そのまわりにスズメ数羽。11:00エサ台にヒヨドリ1羽。5分ほどいて、リンゴ、ムギをたべた。14:43ヒヨドリ1羽、エサ台に来てさかんにリンゴ

をつつく。

72. 1. 2 雪 　　ゆうべからの降りて30センチもか。
小鳥全然来ない。

1. 3 快晴 　　8:10ミヤマカケス1羽、20センチ
以上も積った雪のエサ台に来て雪をかいたが、エサはた
べないようで、すぐとんでいった。間もなくエゾアカゲ
ラメスが、エサ台のむこうの巣箱をかけた木に来て、
十数分つついていってしまった。13:00ミヤマカケス2
羽きて、1羽はエサ台に、1羽は近くの枝に。14:40エ
ゾアカゲラメス、エサ台に。

1. 4 　　うす曇 　　10:40エサ台の下にノラネコがき
ている。雪玉を投げて追う。

1. 5 曇、ゆうべ少し雪 　　9:00となりの庭のシ
ラカバの高い枝にヒヨドリ1羽いて、ピピッピーピと、
いつもと違って節をつけてない。9:40エゾアカ
ゲラメスが林にきて、しばらくいる。これをみていた
ら、赤茶の、いつかの小鳥がとおくの高い木の枝にきた
ので双眼鏡の焦点をあわせているうちに飛んでいってし
まった。

1. 6 雪 　　7:50いつかの、名前のわからぬ小鳥
がむこうの高い枝にいる。双眼鏡でみる。ときどき向き
をかえたのでよくみえた。図鑑をみたらツグミだとわか

り、うれしかった。9:00ミヤマカケス、エサ台に来て
7分間いて、近くの枝に移り、ちよっといて飛んでいっ
た。この間にエゾアカゲラメスがこの枝まできていて
これもすぐ飛んでいってしまった。

1. 9 快晴 　　10:40けきエサ台においたゆうべの
たべ残りのマグロのサシミ、ミヤマカケスがくわえて飛
んでいった。1:25スズメがエサ台の下でエサを拾って
いる。家内がどうもスズメでなさそう、という。ムナ羽
が黄色、頭はねずみ色、背は茶とねずみのしまで、スズ
メくらい大きさ。動作はスズメとまったく同じ。5分
ほどいた。図鑑をみたらアオジ。

1. 10 晴 　　11:30キジメス3羽。家内がみつけ
て、ころふんして呼びにくる。エサ台の近くのササヤブ
の上の雪の上を連れだつてゆったり歩いている。ときど
きヤブの下にくぐる。それから、3羽揃ってしずしずと
雪の斜面をあしあと3条をくつきりとつけて下りていっ
てヤブに入り、しばらくしてこんどは斜面を上り、見え
ないところへ行ってしまった。飛ぶところを見たかっ
たと話したが、これはエゾアカゲラと両横網格の観察だつ
た。

(うちでこの小鳥たちをみたい方は 851-1079へ電話
を下さい。歓迎します。) (札幌市西岡在住)

コヨシキリを見て

小泉三雄

昭和45年のいくつかの記録のなかから、コヨシキリに
ついてまとめてみました。

6月20、27、29日、7月1、4日に計5個の巣を見つ
ける。そのうち3巣は卵が4個、2巣は卵が5個で、う
ち1巣はカッコウの卵が入っていた。

このことについてもう少し記録をたどってみよう。6
月20日営巣しているところを発見したときは、草原の地
上1メートルのヨモギに巣を取付けていた。巣が完成す
るまでに8日かかり、その朝卵を1個、3日後に4個に
なっていたが、その他にカッコウの卵があり計5個にな
っていてびっくりした。

10日後の7月10日、4羽ふ化しており、カッコウの卵
だけくさっている。

晴天が続いたので7月16日目をあけており、とてもか
わいらしい。

7月24日全部巣立ちする。

私の記録によれば、5月18日のヒバリの巣卵から8月

12日のホオアカの巣卵の発見までの間、道北地方ではと
くに6月10日ごろから8月10日ごろにかけて、数多くの
野鳥が営巣するようです。(美深町立第2中学校)





鳥語 (1)

三浦五郎

中学三年の時、室蘭の小鳥というのを書いて、生物の先生から褒められた。今では憚ることだが、鳥捕りの経験や観察を通じて、室蘭の測量山に棲息する小鳥の種類と習性をまとめたものであった。どのようなことを書いたか、今は忘れてしまっている。野鳥との出会いは、六年生のとき、丁度満洲事変の起った秋のことであった。家から谷を隔て、向側は、緩い傾斜の落葉松畑であった。そこに、ヒガラやキクイタダキがよく来た。自分と同じ年頃の子供達が、釣竿の先にとりもちをつけ、狙を定めて樹上の小鳥を刺すのであった。前年、札幌から室蘭に引越して来て、新しい土地の男の子になじめずにいたが、竿を借りたばかりに、彼等と親しくなった。

キクイタダキは、あまりすばしこい鳥ではなかったのに、彼等はバカドリと呼んでいた。それでも、竿の先が射程距離に入ったところで、チッチッと外の枝に逃げられ、捕えることは容易でなかった。捕えても、頭に橙色を置いたこの小さい鳥は、餌につかず、死んでしまうのがほとんどであった。ヒガラは、これに較べると、割に餌付けが易しく、多く飼育されていた。シジュウカラ科のヒガラ、エナガ、シジュウカラなどが、松林によくやって来るのは、松の若葉や芽を好むためであることを、幾年かたって利尻で観察して知った。キクイタダキは、これ等の群とよく行動を共にしていることが多い。ヒガラを、今でもそうであるように、我々は、一般にコガラと呼んでいた。中学二年の英語のリーダーで、野鳥についてのレッスンはあった。ヤマガラは、確かトムテイトと記憶していたが、最近、それを面白く思い、手元の図鑑を調べたら、そうとは書いてなかった。甚だ心外であった。テイトと云うのは、シジュウカラ科の鳥の末尾につく語である。トムテイトを面白く思ったのは、いたずら坊やのトムとは、うまい名付と思ったからである。彼は、いつでもおどけた表情で忙しく動き廻る。

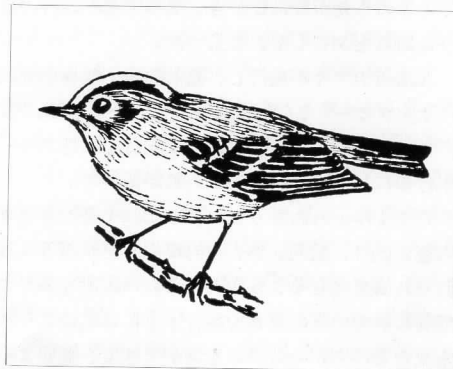
ここまで書いて、ヤマガラは、どうしてもトムテイトでなくては都合が悪く、息子に辞書を借りて調べたらやはりあった。英国で云うとのこと。日本のお伽噺に出てくるモズ吉も、同じ発想である。秋になると、モズが梢で尾を上下させて、キチキチ鳴始める。

私が、一番初めに知った野鳥は、このようにして、キクイタダキであった。ところが、キクイタダキについて昨年興味のあることに気がついた。昨夏の大雪山探鳥会の案内に、ウグイス科キクイタダキとあったのを見て、

少からずびっくりしたわけであった。それは、キクイタダキを、シジュウカラ科と誤っていたからであった。キクイタダキがヒガラと一緒に松林にいたから、そう思っていたというのではなく、清棲幸保氏の著書は、シジュウカラ科としてあったし、小林桂助氏の鳥類図鑑でも、この科の中に配されていたと覚えていたからであった。しかし、図鑑を見直したら、ウグイス科とありながら、他ページに配されているウグイス科から、ひとり、キクイタダキだけが一羽飛び出して、シジュウカラ科の群に交って遊んでいた。この二つのことが、シジュウカラ科と思込ませた原因であった。北大植物園の標本も、丸善で立読みした内田亨監修の図書でも、ウグイス科としていた。最後に、野暮にも、広辞苑を開くと、それには、シジュウカラ科となっていた。広辞苑は、清棲氏の説を引用したのであろうか。書評とするつもりはないが、この図鑑の改版の折には、正当な場所に訂正されるべきものだ。著者が辞典の根本原則を犯してまで、この鳥が、適々、シジュウカラ科と群を同じくすることがある天然自然の状態を、展示したいわけでもあるまいから。これと同じ出版社で出している植物図鑑は、検索表が示されていて、この道の素人でも、好事家には、なにかと便利である。鳥類図鑑でも、分類の基準が記されていると、都合がいい。

旧ろう、病床で吉川幸次郎著「帰林鳥語」を読んだ。陶淵明の詩の中から、この題を思いあてたと述べられている。私の「鳥語」は、勿論、そのような高尚なものではない。氏が苦笑された現代中国語、「でたらめな言葉」の意である。拙稿の題とするに相応しい。

(つづく)



根室で考えたこと

山 本 永 人

今年、根室地方は白鳥の訪れが例年よりやや早く、ガンの旅立ちも早かった。

冷害型の天候不順に影響され、道東地方は鳥獣の生育が悪かったようだ。例年秋口から冬にかけて姿を見せるキツネもその数が少ない。毎年行なうエヒノコックス対策の一つ、有害駆除の効果が現われたのかも知れない。エゾライチョウは巣立ちの頃に雨が多く、気温が低かった為か、出来（当才）が少なかった。三百ミリでねらうがなかなか良い写真が撮れない。

11月、特に10日前後はアカハラ、マミチャジナイ、ツグミが例年になく非常に多かった。

12月12日には街の中のナナカマドに、百羽近くのレンジャクが群がり、ヒリリヒリリ／＼と鳴くその声は雪のおそい根室に雪の近い事を告げていた。

昨年46年度、スウェーデン、アブ社の行なう国際釣りコンテストで日本で始めての金賞を受賞、11月20日東京でアブ社社長レン氏立ち会いで、アンバサダークラブ（大使のクラブ）入会の認証式に招かれた。この会はスウェーデンの皇太子が会長、フィンランドの国王が副会長だと云う。11月18日千歳を立つた。

19日の夜、釣り関係の友人達が歓迎の晩餐会を開いてくれた。集まった八人のメンバーはほとんどが今年根室をはじめ道東を旅行した人達で、それぞれの業界の第一線で活躍し、多い人では十数回の外国旅行の経験者もいる。

みんなが異口同音に云う事は、北海道はすばらしい。美しい。道東の風物は一つ一つが輝いていた。カニの味が格別だった。

Y氏は、釧路空港から根室へ向う原野の景色は北欧そっくりで、泥炭層を濾過した赤みを帯びた川の濁り、その川へマスが登り乳牛が点々と散在、オオジギの急降下と恋のうたが野にひびき、まるで北欧旅行の延長のような錯覚をおこした、と云った。

北海道ナマリが流行し、話しの合い間合い間に“クレイナンドワー”、“ヨカッタンドワー”が連発する。

この夜みんなから、この道東旅行を私達グループの年中行事にしたいが、と申し入れがあった。

昨年1年、入れ替り立ち替り訪ねて来たさまざまな友人達、釣り、観光、猟、目的がそれぞれ違う人達を、それぞれ満足させるよう案内するのは大変な事だった。短期間に根室の真の良さを紹介するには私のようによそから来た者の方がその良さを理解できて、要領よく案内で

きるような気がする。だが受け入れる方の私は大変だ。宿の手配、車の手配、ときには空港を迎えに行ったり、ボートや舟を用意したり、お土産をそろえたり、客が帰る迄四日も五日も仕事にならない。しかしそんなことをいってもいられない。次のグループが入れ替りにやって来る。好むと好まざるにかかわらず私は案内役にされてしまう。その上オオカミウオを生きたまゝで手に入れたい、アザラシの生きた奴がほしい、イトウを生かして15匹ほしい、エゾライチョウの羽根がほしい。シーズンが終ってふり返って見るとそのやっかいな要求をほとんど満している。もちろんそれぞれの分野のベテランの協力があつたからだ。でなければ今頃私はオオカミウオに鼻をかじられ、流氷の海でアザラシのボスにひっぱたかれて昇天してしまっていたであろう。

タラバガニ、毛ガニ、花咲ガニを箱に入れ、桂木の浜へ行きドサッと置く。缶ビールをあけ思い思い好きなだけ食べてもらう。そばを流れる小川で手を洗う。写真を撮ったり、“キレイな海だ”、“広くて生きかえるようだ”、“カニってこんなにうまいものか、知らなかった”、率直に感動し喜んでくれる人達、それが私にとってとてもとても嬉しい。

今根室へ来るようなグループの内、20名程の人達が原野に丸木小屋を作り、ランプ生活をして、それぞれのシーズンの自然に親しみたいと云う案が進んでおり、場所の選定をまかされてしまった。

人は今、都会のコンクリートの墓場から野に還ろうとしている。都会の周辺には人の心を癒やす人の還るべき野は無い。そこに住んでいたさまざまな虫や鳥、動物や植物は産業と云う錦の御旗に押しつぶされ葬られてしまった。残ったのは繁栄と云う名のコンクリートの墓標だけであり、動物や鳥は鉄のオリに入れられ、わずかに人々に慰めを与えている。都会の人々は大きな自然とそこに住む人々との温い交流を求めている。だが旅に出ても孤独な彼等は自然やそこに住む人達に与える思いやりの心、温かさはすでにない。傷つくのはいつも自然とそこに住む人達である。彼等は旅の思い出を確めるために一つの品物を金銭と引き替えに得ることで満足し、孤独に都会へ帰る。

観光客から利益を追求するだけのすれっからしの観光事業、観光対策の多い昨今、根室市のように無策に近い対策のほうが、むしろ観光客に親切なのかも知れない。

今年根室市内のハンターは、初猟以外にほとんど風連

湖へ入らなかつた。漁師が言っていた。「今年はテッポの音がしないがみんなテッポやめたんかい。ガンが来てるぞ！」この漁師はガンの禁猟を知らないらしい。たしかにガンは多かった。昨年約4・5百羽と云われていたのに、今年は7百羽位を目撃した人が数人いる。

46年10月31日付道新に「野鳥の楽園づくり」と云う見出しで、道環境局が現在狩猟が野放しになっている道東の風蓮湖、道南の大沼、十勝の大津原野など、広大な保護区を新たに指定して狩猟を禁止、野生鳥獣のオアシスをつくる事を検討している。このため11月1日に開かれる道鳥獣審議会に保護区域拡大を協議してもらおう、とあった。本当に良いことだと思う。やゝおそきに失した感じもする。

しかし、11月2日付道新記事、「保護区さえ設ければあるいは鉄砲さえ撃たせなければ、と云う安易な考え方は鳥獣の保護はできない。森を残してもそのまわりの自然が破壊されれば鳥獣は生息できない。」全くその通り。

根室の入口にある春国俗は禁猟区で、ガン・カモ類、キツネ、タンチョウ等の生息地である。昔はエゾライチョウもいたが、近年森林の伐採が進みなくなった。またツルの営巣地へ牛の群が入りタンチョウの巣を足でふみつぶし、親ツルが去ってしまった。いくら禁猟区に指定しても、仏作って魂入れずで、自然環境の破壊は鉄砲の被害より決定的ダメージを鳥獣に与えてしまっている。

11月2日道鳥獣審議会一委員・「鳥獣の生息調査をするにしても、しっかりした体制を考えなければ、実際に使いものにならないデータになるおそれがある」。その通り、今年もそうであるが、46年1月18日全国一斉調査の資料は全くのナンセンスとしか思えない。これはこれなりに一つの意義はあるかも知れない。しかし実際に使いものにならないデータでは意味がない。ツル、ハクチョウ等の調査と云うのならわかるのだが、表紙にはガンカモ科の鳥類と書かれている。本道の鳥類の最も動きの早い11月初旬から末にかけての調査と云うのなら話はわかる。実際に1月18日と云うのは猛禽類の渡りがわずかに見られるだけで、早い話がシーズンオフである。3月に入ると早い渡りはまた北に戻りはじめ、根室近郊の草原には数千羽のオナガ、ヒドリ、マガモ、ヨシがやって来る。北海道には北海道の実情がある。一定期間に連続した調査を行わなければ正確な鳥類の動向、数はつかめない。一斉調査というからにはそれが何らかの資料になることはうたがう余地はないが、こんな資料を使うからお役所仕事と云われるのである。

11月3日付、日本経済新聞であったと思う。大石武一環境庁長官の談話として、ハンターによる事故が続発している折「このように事故が続発するのは重大な政治問

題なので……“全国禁猟区”構想を盛り込むつもりだ」と発言した。

1. 狩猟解禁に伴って1日は全国で20件以上ものハンターによる事故が発生した。死亡者が出る事になれば重大な政治問題だと思う。したがって人命尊重の立場から思い切って手をうつつもりだ。

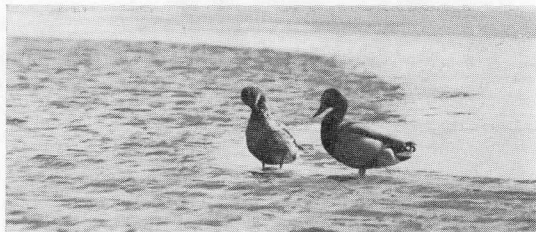
1. このためわが国の全土を禁猟区にして、その一部に限って狩猟地区の指定をすることとしたい……。

これだけで事故防止ができるなら非常に楽なことである。長官は何か感違いしているのではないだろうか。禁猟区の問題と事故防止の問題とは全く別問題である。フィールド競技でさえケガ人や死者の出るこの頃、およそ山に海に野に空にスポーツと名のつくものでケガのしない死者の出ないものはまずないだろう。しかしいまだかつてこれらは重大な社会問題になったためしがない。大石長官の親心、ハンターに取って喜ぶべきか悲しむべきか、それは別として、もっと素直な明快な論理で自然保護をと立ててほしい。ハンターに意識の高揚を求め、現在の実情を正しい調査資料に基いて説くまじめさがほしい。学識者も名を連ねていながら、これは恥ずべきことと思う。鳥獣と自然保護保全の第一歩は観察保護であるが、それが正しく出来なくて何の審議会かと云いたくなる。

こういう例がある、中島将行医博が数回の北方海域への航海で海獣類の調査をし、あるデータを公表した。しかしこのデータには一部に間違いがあった。しかしこのデータを自分の著書に転用した有名な学者がいる。この人はその間違いに気付いていないらしい。

昨日まで産業優先、人間尊重の政治が、一夜明けて鳥獣尊重、自然優先になれば喜びながらも割り切れないものが多く残る。こと自然環境保全に対しては、各行政官庁はみえを張らず地道に実行してほしい。審議会は願わくば安易な妥協をさけ、自分の足で原野を歩き、自分の目で北海道の原野がどういう立場におかれているか真の姿を見てほしい。そしてひたむきな態度で正しく現実の調査をし、それに基いて行政官庁は有効な正しい行政を行なってほしいものである。

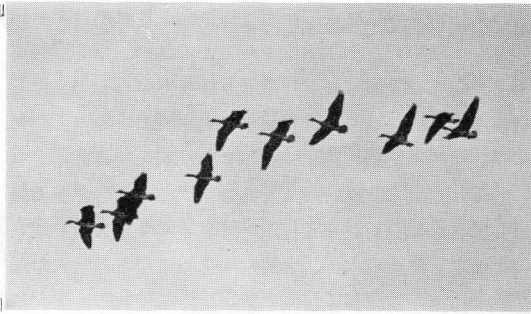
私達猟友会員はいつでもお手伝いできる体制にある。



片野の鴨池

四十万谷 吉 郎

(写真は昭和42年 百武充)



片野の鴨池と、突然題名に掲げてもしらない人が大部分だと思います。鴨池は石川県の南端にある加賀市の中心大聖寺町から車で10分くらいの所にあり、四方を山で囲まれた3haほどの池のことです。池といっても夏の間は山際に小さな溜池と、水田と細い道が一本あるだけの何の変哲もない山間の水田地帯です。それが稲の刈り取りも終り、10月の中旬頃から水田に水が張られ、上記のような大きさの池に変化してしまうのです。この池に9月の下旬よりガンやカモの類が大挙して押しかけ（ガンの去年の初渡来は9月22日だったそうです）、これらの鳥の越冬場所となるのです。又、ここでは、夕暮れ時に池を囲む山の頂きから、餌を求めて飛び立つ鴨を、特殊な網を投げ上げて捕る、昔ながらの鴨猟が今も行なわれています。

私は、今年の正月金沢に帰省した折り、この片野の鴨池に立ち寄って来ました。

池の道路側に二階建ての監視小屋兼観察小屋が建っており、そこの二階から鳥を見るようになっています。二階には10円硬貨を入れなくてもよい望遠鏡が据え付けてあり、だれでも自由に見ることができるようになっています。この鳥は自動車が池の前を通っても全く知らん顔をしています、人の姿を見ると驚ろいて騒ぎたてます。5年ほど前、始めてここへ、友達と訪れたとき、道路をあちこち歩きながら、夢中で鴨の姿を追い求めていて、小屋の管理人に、おこられたこともありました。

この建物の二階から池を見下ろしますと、水の上、一



面にカモやガンが羽を休めていました。管理人の話によるとカモは二万羽くらい、ガンは千羽を越すだろうとのことでした。ガンの数は、ちょっと疑問ですが、カモの数は数えられないほどでした。ガンの仲間ではマガン、カリガネ、ヒシクイがおり、カモの仲間ではマガモ、コガモ、オナガガモ、ハシビロガモが見られました。このうちマガモが最も多く、その他のカモは、よく探さないとわからないくらいでした。ガン、カモの他、カワウ、アオサギ、ダイサギが見られました。管理人の話では、向う岸にはトモエガモがいるとのことでしたが、小生が少ないボーナスの中からやっと買った望遠鏡では、向う岸のカモは黒い小さなシルエットとしか見えず、どれがトモエガモやら、さっぱりわかりませんでした。また、毎日夕方になるとコサギがあらわれるとのことでした。小生が行く二、三日前にはオジロワシが来ていたそうです。やはり5年前、ここで始めてオジロワシとハクガンに直面したことが昨日のように思えてなりません。今回も何か珍しい鳥が見られるのではないかと期待していたのに。

カモは時々一群となって飛び上がることがありましたが、その点ガンは落ち着いたもので、ほとんど動かず、羽の中に首を突っ込んで水面に浮いているか、^{おなか}陸の上で首を伸ばして、互に鳴きあっていました。その声は池の見える前から、さわがしく聞えてきます。

鴨猟は夕方になると行なわれ、各自の猟場は幾つか決められており、その日の天候、風向き等により猟をする場所を変えるそうです。猟場の定員は決っており、かつ猟の技術が難しいために、いたって閉鎖的に猟が行なわれています。この鴨池では一般のハンターが入れないために、鳥の渡来数が減っていないとのことですが、現在のように、各地に渡って来るガン、カモの数が減少しているときに、伝統の継承ということで、このような鴨猟が許されていいものか疑問だと思います。この鴨池のように鳥を見るのは建物の中からだけで、しかも大きな声を出したり、窓を開けてはいけないというような強い規制をもった観察場所は、鳥も安心でき、かつ見る方も、ゆっくり見られるということから、このような施設が各地に広まってよいことと思います。

(農林省北海道農業試験場)

野外観察のための図鑑

「野外観察のためには、どのような図鑑がよいか」というご質問がよくあります。たくさん出版されている鳥類図鑑のなかから、野外観察に使いやすい図鑑を簡単に紹介しましょう。

1 野外観察用鳥類図鑑 正統2冊 各600円 日本鳥類保護連盟発行

長年、鳥の野外観察を続けているベテランが、図・説明を書いたもので、野外で鳥を見分けるポイントに重点をおいて解説している。大きさが新書版で、持ちあるくのに便利である。

なお、この本は市販されていないので、発行者に直接申し込む必要がある。あて先は〒150 東京都渋谷区南平台町8~20 日本鳥類保護連盟 振替東京19214

2 原色日本鳥類図鑑 小林桂助著 2,200円 保育社

いままでに記録されたことのある日本の鳥を全部原色で指示し、解説したものである。とくに野外用の本というわけではないが、探鳥会などで見た鳥を確認したりするのによい。大きさはA4版で持ちあるきやすい。

3 A Field Guide to the Birds of Britain and Europe. R. Peterson著 Collins. London 1,500円程度

シギ・チドリ類、ガン・カモ類のような水鳥は、欧米と共通の種類が多いので、熱心な人は外国の図鑑をとり寄せて使っている。この本は、いわゆるミピーターソンのフィールドガイドミとして知られているもので、これらの鳥の野外での識別には非常に有用である。この本はヨーロッパとイギリスの鳥の図鑑で、英・独・仏語版があり、また、同じスタイルによる、北米東部、北部西部の鳥のガイドも出ている。

4 The Hamlyn Guide to Birds of Britain and Europe. B Bruun, A Singer著 Hamlyn. London 1,500円程度

上記ピーターソン・ガイドより、いっそう野外観察用に徹した本として、近頃評判になっている本である。この本もヨーロッパ編のほか、北米の鳥のガイドがあるが、どちらも記述はごく簡単で、あまり英語の得意でない人も使えるようにできている。

上記の本はどれも事務局に置いてあるので、興味のある方は御覧ください。なお、3、4は丸善の洋書部に注文すればとりよせてくれます。

冬鳥・夏鳥の記録 (昭和46年秋)

◇冬鳥の初認

アトリ	10月3日	美唄市光珠内	藤巻裕蔵
カシラダカ	10月23日	〃	〃
ツグミ	10月19日	江別市大麻	百武 充
〃	10月23日	美唄市光珠内	藤巻裕蔵

◇夏鳥の終認

カッコウ	7月23日 (終鳴)	江別市大麻	百武 充
〃	8月21日	美唄市光珠内	藤巻裕蔵
オオヂシギ	8月20日	〃	〃
モズ	10月3日	〃	〃
ハリオアマツバメ	10月2日	〃	〃
キジバト	10月30日	〃	〃
ウグイス	9月30日	〃	〃
アオバト	8月26日	〃	〃
ビンズイ	10月28日	〃	〃

アカハラ	8月7日 (終鳴)	江別市大麻	百武 充
〃	8月23日	美唄市光珠内	藤巻裕蔵
エゾセンニュウ	8月5日 (終鳴)	江別市大麻	百武 充

レンジャクのたより

この冬のレンジャクは正月ごろからあちこちで見られているようです。

46年12月31日	約50羽	札幌市琴似山の手	菅野寿衛吉
47年1月9日	約200羽	札幌市真駒内	衛藤たみ子
1月10日	約50羽	札幌駅北西	百武 充
〃	約10羽	札幌市真駒内	新妻 博

◇自宅のまわりや通勤の途中でみた鳥のニュースを事務局までおしらせください。ハガキでも電話でもかまいません。

□ 新年談話会ひらく

2月5日午後1時半から4時半まで、林業会館大会議室でひらきました。九州遠征から戻ったばかりの萩幹事の撮影した、鹿児島県荒崎のマナヅル、ナベヅルなどの美しい写真を中心にカラースライドを鑑賞したあと、懇談会にうつりましたが、活発な発言が続いたため、閉会を予定より30分も延長するほどでした。

参加者 青柳正英、青柳信子、阿部珠江、井上元則、入江義智、入江智一、岡田祐一、古賀野完爾、小山政弘、佐々木勇、さとう実、清水保雄、新宮康生、赤城祥子、但野優子、苜野寿衛吉、豊島博男、新妻博、松原徹、西川喜久世、野口正男、羽田恭子、平沢清一、平沢光代、三浦五郎、見藤とし子、柳沢信雄、柳沢千代子、湯本信幸、土屋文男、大角武雄、小沢広記、亀尾紋十郎、佐藤幹四郎、阿部雅樹、佐藤順子、安田鎮雄、野村梧郎、百武充、萩千夏子 以上40名

□ 役員会開催

1月8日午後1時半から3時まで、林業会館小会議室でひらかれ、会計、会の行事予定などを討議しました。

□ 47年度分の会費を受付けます

昭和47年度分の会費を受付けています。金額は300円で、送り先は札幌市北3条西6丁目 北海道環境局自然保護課内 北海道野鳥愛護会事務局まで。現金書留か郵便小為替でおねがいします。また46年度分未納の方には先号発送の際督促しましたが、まだ未納の方がいらっしゃいます、いろいろ御都合がおりでしょうが、できるだけ早く納入してください。

野幌森林公園を歩きませんか

野幌森林公園の探鳥散歩に次のとおり出かけます。おヒマな方はどうぞおいでください。

◇日 時 3月26日、4月23日、両日とも午前9時国鉄大塚駅待合室に集合

◇3月はスキーかカンジキが必要かもしれません。

◇昼食、雨具、防寒具など用意してください。

◇都合により中止することもあります。同行される方は必ず前日午前中に下記までご連絡ください。

◇連絡先 道庁自然保護課 (TEL 231-4111-内線3896) 百武 充

《事務局だより》

◇ しばらくオリンピック色に塗りつぶされていた札幌も、どうやら平常に戻ったようです。スポーツ新聞みたいな各新聞の紙面をわずらわしく思い、「高い金をかけ、自然を破壊し……」というブランド誌発言に幾分の共感を覚える身としては、これでやっと息がつける気分ですが、それはともかくとして、今年もよろしくおねがいします。第9号、また遅くなってしまいましたが、お届けします。

◇ まだ風はつめたく、雪も降りますが、陽の光の強さはまぎれもなく春の近いことを教えてくれます。森では、ゴジュウカラやヘンソウハシブトガラがもう歌いはじめました。春の回帰は、いつもながらうれしいものです。

◇ 昨年は環境破壊の問題が大きくクローズアップされた年でした。尾瀬の道路問題と大石環境庁長官の活躍、そして尾瀬の平野長靖さんの悲劇的な死などは、まだ記憶に新しいところです。北海道でも大雪

山縦貫車道、サロベツ原野開発計画などで自然保護と開発との対立が表面化しましたが、いずれも解決は今年にもちこされています。

◇ これらの問題に関して、自然をまもるための市民組織の活動がめだったのも、新しい傾向でした。結局、市民ひとりひとりの自覚した行動がなければ自然はまもれない、ということなのでしょう。

◇ 本誌の原稿は、各号の発送のとき、会員番号順に50名ほどの方に依頼状をさしあげてお願いしています。しかし、とくに事務局からお願いしなくても、いくらでも原稿をお寄せくださって結構なので、むしろ、そのような積極的な会員が多くなるほど、会としても活動の幅をひろげてゆけると思います。

原稿でもご質問でも、本誌や事務局に対するご批判でも、遠慮なくお送りください。

◇ この次は第10号、野鳥だよりもいよいよ2ケタになります。そして、会も創立2周年。ほんとうに早いものですなどと感心ばかりしてもいられません。会の進むべき方向はどこか、皆様と一緒に考えてゆきたいと思います。